

絵本の与え方の試み〔Ⅱ〕

一園内におけるよみきかせについて

清田麗子¹ 佐藤房枝² 石黒三枝子³ 真壁葉子⁴
 斎藤栄子⁵ 八幡イウ⁶ 安達順子⁷ 伊藤一子⁸

Ⅰ 主題設定の理由

幼児期というものは、みずみずしいあふれるような感情をもっている。そして、やわらかい感受性によって、すべてを新しく学びながら自分の世界をきりひらき、広げようとしている旺盛な探求心、好奇心に満ちている。

このような幼児期に、実物や体験によって教育することも大切であるが、同時に、すぐれた絵本を与えることによって、本来もっている人間的な感情を、正しく伸ばしていくことも重要であると考え。ことに、自然と親しく会話のできるこの時期をのがさず、幼児の心理と興味に即した適切な本を与えることが大事なことであると思う。

すぐれた絵本は、子供の想像力、思考力、情緒を高め、段階的に読書への関心を育てるといわれている。つまり、幼児期に適切な絵本を与えて指導することが本格的な読書への橋わたしをするという点に大きな意義をもつものと思われる。

しかし一方、幼児の絵本への興味を阻害するものがあるということも実態である。家庭では、絵本が幼児の成長にとって必要であるということに対して無関心である。必要だと考えても、読んでやる時間を生みだせない、良い本が身近にない、など。幼児の側から考えられることは、直接的な強い刺激に興味を引きつけられている。良い本が身近にない。親が読んでくれない、など。一方、園内ではどうかという点と、従来、保育の中での絵本はそれほど重視されてはいなかったのではなかろうか。その本がそこにあったから読んでやるという安易な態度であったり、一連の保育活動の中で導入や、まとめ、あるいは、生活指導のための手段として絵本が取り扱われることが多く、絵本そのものの価値に目をむけ、その価値に迫るための指導ということはなかったのではなかろうか。

そこで、今までの絵本のとり組み方を反省し、「絵本そのものの面白さがわかる子供」「本好きな子供」にするということに目標をおき、どのような本を、どのような方法で与えたらよいか考える必要に迫られ、主題を設定した。

-
- | | | |
|----------------|------------------|--------------|
| 1. 新潟県立教育センター | 2. 新潟県立中央高校附属幼稚園 | 3. 新潟市立沼垂幼稚園 |
| 4. 新潟市立牡丹山幼稚園 | 5. 新津市立新津第一幼稚園 | 6. 中条町立本条幼稚園 |
| 7. 小須戸町立小須戸幼稚園 | 8. 鹿瀬町立鹿瀬幼稚園 | |

Ⅱ 研究のねらい

幼児は、自分の受けた感動を身近な人にぶっつけてみたい。語り合ってみたいという欲求がある。それを引きだし、語らせながら、絵本に対して興味をもたせるように、ある一つの「よみきかせ」の方法を試みることにした。

Ⅲ 研究内容

絵本は、経験を広めたり、絵や文によって子供の中にイメージがたしかなものになったり、想像力がかきたてられたり、人間的な感情を正しく伸ばしたり、思考力、判断力を刺激するなど、絵本の果す役割が大きいことはいうまでもない。

そこで、この良さを満たすには、ただ読んでやるだけでなく、幼児なりに学習を組織しなければならないと思う。そうすることによって、一度読んだだけではわからなかったほんとうの面白さ、楽しさがわかってくるのではなからうか。そのために、園内で絵本を与える時には、「だんどり」「よみきかせ」「たしかめよみ」という操作を通して読み深めていくことが大切であると考え、ある絵本についてこれを試みることにした。

Ⅳ 指導の試み

1. 三操作について

・だんどり —— 学習の動機づけの段階。子供たちが物語の中に入りこめるような環境をつくる。あらかじめ理解させる必要がある場合は、実物、写真、絵図、説明などで共通理解させておく。表紙を見せたり、題を読んでやったり、予想させたりして、興味、関心を高める。

・よみきかせ —— 読んで聞かせる段階。読み聞かせながら、描かせ（聞き手の子供の想像力に働きかけ、イメージを描かせる）感じさせ（聞き手の感情に許え感じさせる）考えさせ（事柄や意味についての思考力を働かせる）る。そのためには、幼い子供ほど聞きとりが鈍く、イメージ化も遅いので、テンポを全体にゆっくりする。そして、子供たちが作中の人物の身になり心になり立場に立って聞けるようにすることである。問答など一切せず、ひたすら読み聞かせることである。

・たしかめよみ —— 子供の興味により、さらに読みを深める段階で、だんどり、よみきかせの学習期間を十分にとり、子供たちが絵本に関心を示しはじめてから少しずつ入っていくようにする。場面や筋などに従って相関関係を読みとらせるための段階である。筋の展開にそい、場面ごとにいく方法もあるだろうし、主題に迫る場面だけを取り扱う方法もあるだろう。また、登場人物などを言わせたりしてざっと通し、次にくわしく積み重ねていく方法、劇化、感想、想像など、子供の年齢や体験、作品によって違ってくるはずである。要は、教師自身の教材研究と、子供にあきさせず短時間にやるのがコツである。

2. 指導例

書名 おおかみと七ひきのこやぎ（グリム童話，フェリクス・ホフマン，絵，せたていじ 訳，福音館書店）

作家と作品について

グリム童話は、兄ヤーコプと、弟ウィルヘルムの共同の仕事としてできあがったものである。ドイツのヘッセン州ハーナウという町に生まれ、兄弟共、同学校に学び、大学では法学を学んだが、語学や文学が好きで、結局、その方面に進んだ。有名な「ドイツ語辞典」は、プロイセン王のウィルヘルム四世に招かれて、ベルリンで学士院会員となり、編集したものである。こうした中で、ドイツ語研究の一環として、また、民話が、古代、中世の生活をあらわす有力な資料であり、ドイツの民族性、国民性をあらわす口承文学であると考え、古老の話を、じかに聞いて、書きとる万法であつめたものが、グリム童話の中にまとめあげられている。

画家のフェリクス・ホフマンは、スイスのアーラウ生まれ。ドイツのカールスルーエの美術学校と、ベルリンの美術学校卒業後、故郷に帰って活躍しはじめた。現在スイスでもっともすぐれた絵本作家だといわれ、また、国際的なさし絵画家である。七匹の子やぎの話は、多くの人によって絵本にされているが、この人の絵は、せんさいな線によって動物の姿をリアルに描きながら、作品のもつ劇的性質をつむぎあげ、新鮮な印象を与えている。他に日本で出版されているホフマンの絵本として「ねむりひめ」（福音館書店発行）がある。

訳者、瀬田貞二は、東京生まれ、東京大学文学部国文科を卒業後、児童文学の批評、評論、創作、翻訳などで活躍している。1967年には、「ナルニヤ国物語」でサンケイ児童文学賞を受け、多くの本を訳したり、創作している。絵本では、「七匹の子やぎ」の他に「おだんごぼん」「ビー海にいく」「海からきた小さなひと」「マドレーヌといぬ」（福音館書店発行）などがある。

ジャンル 民話絵本

構造

語り手の語る文体によって、語り手の目を通しておおかみと子やぎたちの行動を描いている。また、お母さんやぎが帰ってきた時の場面で、「ああ、おかあさんやぎは、なんというありさまをみたことでしょう。」とか、「はなしをきいて、おかあさんやぎが、どんなにいたかおわかりでしょう。」など、語り手の気持を、聞き手に賛同を得させるように語りかけているところもある。

この話の中心となるおおかみの侵入を境として、おおかみに食べられるまでと、食べられてから助けだされる過程が、前半と後半に分かれ、途中、子やぎとおおかみの対話の繰り返しの面白さなど織り交ぜて構成されている。

はじめ、お母さんやぎと子やぎたちの楽しい平和な生活が、お母さんやぎが子やぎに、おおかみについての注意を与えて家を出て行くところから、その留守の間に、子やぎの命をねらうおおかみの侵入によってどん底につき落とされる。「おおかみの手をかえ、品をかえてやってくるずる賢さを、お母さんも十分認識していなかったため、子やぎたちは不幸な目にあった。しかし、子を思うお母さんやぎの愛

が、子やぎが食べられたという危機的状況の中で、寝ているおおかみのおなかに子やぎが生きているのがわかるとすぐに行動をおこし、その場その場の状況から判断して、しまいには、子やぎを助け出すことができた。そして、最後の子やぎを見守るお母さんやぎの姿を描いた場面は、子やぎとお母さんやぎとの生活が、はじめ以上の幸せな生活にもどったことをあらわしているようである。

この作品の文と絵の構成は、一方に文、片方に絵となる場面、また、左から右へと2ページにわたって絵と文がかかかれている場面も出てくる。おおかみの手を白くしてもらうため、パン屋から粉屋に行く場面では、おおかみの行動の時間的経過が、左から右へと描かれているので、同一画面に二匹のおおかみが出てくる。また、おおかみが足を白くして、こやぎの家ののぞき窓から手を出す絵と同じ状況を、今後は子やぎの家の中から窓ごしに白い足がみえる絵などは、おおかみの方からと、子やぎの方からと角度を変えて描いてある。これは聞き手に、おおかみはだましているんだ。子やぎが危ないという気持ち、つまり、子やぎの方に同化させ、この話のやまばというべきおおかみの侵入を盛り上げるために、効果的な描き方だと思う。

人物

お母さんやぎ——「そのやぎが子やぎたちをかわいがることといったら、どのおかあさんにもまけないくらいでした。」と、書かれているように、愛情深いお母さんである。しかし、家を出る時に、子やぎたちに、おおかみについての注意を与えていったにもかかわらず、また、そのいいつけを子やぎたちは守ったのに食べられたのは、お母さんやぎが、おおかみの本質を十分に知っていなかったためと思われる。つまり特別なえらいお母さんというのではなく、平凡なお母さんとしてとらえたほうがいいのではないだろうか。後半、子やぎを失ったお母さんが、泣く泣く外に出て、おおかみの寝ているのをみて、まだ生きている、すぐ糸とはさみをもってこさせて、それから石をつめ、すばやくぬいあげるといふ行動は、結果としてみれば、賢い行為にみえる。しかし、一刻も早く、子やぎを助け出したい、なんとかしたいという、子やぎへのひたむきな愛が生み出した行為として考えられる。このお母さんやぎは、平凡な人間が、危機的状況の中で、時にはすばらしい生き方をするものであるという典型ではないだろうか。

子やぎたち——七匹の子やぎの一匹一匹には、性格としてあげられるものはこの話の中にはみあたらない。子やぎたちは、お母さんやぎのいいつけ通り、おおかみのしわがれ声と足の黒いには、みな「お母さんじゃないもん。」と言いきって、おおかみを追い返す。すなおな子どもらしさを感じさせる。しかし、結局おおかみに食べられたというのは、おおかみに対しての全体的判断の不足から、おおかみの正体を見破ることが出来なかったことにある。お母さんに助け出されてからも、すぐお母さんの言うことを聞いて、みんなで石を集めたり、おおかみが死んだときは、喜びあうというように、七匹とも大変仲良しである。明るくて、すなおであるが、経験不足ゆえの失敗をすることのある、いわば、幼い子どもというものの典型と考えられる。

おおかみ——いろいろな話の中でおおかみは、悪役として登場するがこの話でも例外ではない。つまり、子やぎの命をねらうものとして登場する。おおかみと子やぎの対話の中で、声がしわがれ声だから

お母さんと違うといわれて、声をきれにし、足が黒いから違うといわれて、足を白くするなど、わる知恵を働かせて子やぎをだまし、えものを手に入れる。ずる賢いことさう頭がよいともいえない行動もする。おなかいっぱいになるとあとさきかまわず寝てしまうという、動物の本能をあらわしている。寝て起きた時に、おなかの中でゴロゴロするのはなんだろう。石ころみたいだぞと思いつつ、そのまま水を飲みに行き死んでしまう。おおかみはその場かぎりの判断、欲求でもって行動する人物としてとらえることができると思う。

主題

おおかみの本質を十分に見ぬくことのできなかつたために、たいへんな危機におちいってしまうが、母のひたむきな愛情と知恵によって、死地を脱し、ふたたび平和をとりもどすことができたということではないだろうか。

目標

- ・お母さんがいいなあと、なんとなく感じるように、お母さんの知恵より、お母さんの子どもを思うひたむきな心が、解決の手だてをみつけたことを読みとることができる。
- ・絵を見ながら、自分なりの言葉で母やぎの愛情について話せる。

だんだん （Ⅱ教師の言葉がけ　・留意事項・本文（　）予想される子供の言葉・心　以下同じ）

じっと表紙の絵を見せる。自由に想像して話させる。おおかみと七ひきのこやぎ、グリム童話、フェリクス・ホフマンえ、せたていじやく、と読む。Ⅱこやぎたちが戸のところで何をしているのでしょうか。Ⅲどうして、こやぎたちはお母さんだと思いましたか。Ⅳおおかみと七ひきの子やぎの話を知っている人にお話してもらいますよ。先生がお話にあわせて絵を出します。Ⅴあしたは、先生がこの本を読みましょう。今、話してもらったとおりかどうか、楽しみにしてね。

よみきかせ　1回目　ねらい……話へ期待をもちながら聞くことができる。

- ・次の場面はどうなるかと、スリルとサスペンスを盛りあげていくように、＜間＞のとり方に特に注意してやる。・お母さんやぎが子やぎに言って聞かせる言葉は、ゆっくり読んでやる。・はじめ静かに淡々と、やがてだんだん緊迫して頂点に達し、後半また盛り上がるようリズムをつけて読み聞かせる。・お母さんやぎがどのようにして子やぎを助け出したか、その時の気持がわかるように、お母さんやぎの言葉、行動をはっきり押さえて読み聞かせる。・末っ子の子やぎの所在をはっきり指で示してやる。

よみきかせ　2回目　ねらい……絵を見ながら大事な言葉が言える。

- ・主要な言葉・文を部分的でよいからいえるようにする。言えない時は、ゆっくりと読んで聞かせるようにする。

場面	主　　要　　な　　文

1.	<p>○おかあさんやぎが、こやぎたちをかわいがることといったら、どのおかあさんにもまけないくらいでした。</p>
2.	<p>○これからもりへでかけるよ。おおかみにくれぐれもきをつけておくれ。しわがれごえと、あしのくろいのにきをつければわかるだろうよ。</p>
3.	<p>○おかあさんやぎは、あんしんしてでかけました。</p>
4.	<p>○あけておくれ、こどもたちよ。おかあさんだよ。たべものをもってきたよ。 ○おかあさんはやさしいこえだよ。おまえのこえは、しわがれごえだ。おまえはきっとおおかみだろう。</p>
5.	<p>○はくぼくをいっぼんください。</p>
6.	<p>○あけておくれ、こどもたち。おかあさんだよ。たべものをもってきたよ。 ○それじゃのぞきまどからあしをみせてくれ。 ○あけるもんか。おかあさんならまっくろなあしじゃないぞ。おまえはきっとおおかみだろ。</p>
7.	<p>○ねりこをべったりぬってくれ。 ○このまえあしに、しろいこなをかけてくれ。かけなきゃきさまをくってやる。</p>
8.	<p>○あけておくれ。こどもたちよ。おかあさんがかえってきたよ。おいしいものをもってきたよ。 ○それじゃあしをみせてくれ。そうすりゃおかあさんがどうかわかるから。</p>
9.	<p>○あしがしろいのをみて、こやぎたちは、おかあさんだとおもいこみ、さっと、とをあけました。</p>
10.	<p>○おおかみでした。 ○テーブルのした、とだなのなか、だんろのうえとした。こしかけのした。すみっこ、はしらどけいのはこのなか。 ○おおかみはたちまちみつけたして、つぎつぎにかぶりがぶりとのみこみました。 ○とけいのはこにかくれていたいちばんすえのこやぎだけはみつかりませんでした。</p>
11.	<p>○テーブルやいすやこしかけはひっくりかえり、ミルクつぼはこわれ、カーテンはびりびり</p>

	にさけています。 ○ おかあさん，ぼくはとけいのはこにはいっているよ。
1 2.	○ おかあさんは，なくなくそとへでていきました。
1 3.	○ おかあさんやぎは，おおかみをあちこちからながめて，ふくれたおなかのなかにもくもくうごくものがあるのをみてとりました。 ○ すえのこやぎは，はさみとはりといとをとりに，うちへかけもどっていきました。
1 4.	○ じゃきっとーはさみいれるがはやいか，びょこんとこやぎのあたまがつきだしました。おおかみががつがつのみこんだので，こやぎたちはぜんぶいきていたのです。 ○ さあ，おがわへいって，いしをもっといで。よくねてるまに，このわるもののおなかのなかに，いしをつめておきましょう。
1 5.	○ さっとおなかをぬいあわせましたが，あまりてばやいものですから，おおかみはなんにもきがつかず，みうごきひとつしませんでした。
1 6.	○ おなかのなかで，ごろごろがらがらころがるやつはなんだろう。
1 7.	○ どぶん！
1 8.	○ おおかみしんだ！ おおかみしんだ！ ○ ぐるぐるいどのまわりでおどりをおどりました。
1 9.	○ （みんなまた一緒に暮すことができて，あゝよかったなあ。）

よみきかせ 3回目 （1回目に準じて読みきかせる）

たしかめよみ ねらい……子供を思う母やぎの愛情を読みとることができる。

（ Ⅱ 発問例 留意事項 （ ） 予想される幼児の言葉 ）

場面	て だ て
1	Ⅱ お母さんやぎは子やぎたちを？（かわいがった。どこのお母さんにも負けないくらいかわいがった）

1. ○画面に物語のすべてが出てきていることを、もう一度思い出させる。
2. ■ところが、お母さんやぎが外へ食べ物を捜しに行ったとたんに、事件がおきましたね。どんなことでしたか。(おおかみ。おおかみがきた。おおかみが来て、子やぎを食べちゃった。おおかみが、子やぎをがぶりがぶりと食べちゃった。)
9. ○3場面 ～ 8・9場面と、しだいに早くめくるようにしていく。
10. ■そう、おおかみでした。
 - 10場面を出す。
 - 子やぎたちの隠れたところを左の絵から順に指で示していく。
 - おおかみは、子やぎを？(かぶりがぶりとのみこみました。)
 - かぶりがぶりとのみこみました。と、子供と一緒に言う。
11. ■お母さんやぎが森から帰ってきて、家に入ったとたんどう思いましたか。(ちらかっている。テーブルやいすがころんでいる。ミルクつぼがこわれていた。びっくりした。驚いた。)
- びっくりしたのは、どこでわかりましたか。(体がうしろへいつてる。手をあげている。こうもりなげたまんまだ。かごをかついだまんまだ。)
- そう。見てごらん。かごはせおったままだし、日傘はほっぽりだして……ね。お母さんやぎをどう思う。(かわいそうだ。)
- すえの子やぎの話を聞いて、お母さんやぎはどんなに泣いたか、……よくわかりますね。
- しばらく、じっと絵を見せ、母やぎの驚き、悲しみを共体験させる。
12. ■お母さんやぎが、泣く泣くどうして外へ出て行ったのですか。(子やぎを捜しに。子やぎが生きているといいなあと想着。)
13. ■そうね。子やぎたちは？(生きていた。かぶりがぶりのみこんだから生きていた。)
- 子やぎたちが生きていることは、何で分かったのですか。(おおかみのおなか動いた。おおかみのおなかをもくもく動いた。)
- その時、お母さんやぎは何と言いましたか。(やれ、ありがたい。かわいそうなこやぎたちが、まだいきているにちがいない。)
- 末の子やぎが、何をするために、はさみや針を取りに行ったのですか。(おおかみのおなかを切って子やぎを出すために。子やぎを助けたいから。)
- ゆっくりとめくる。
14. ■あゝ、そうでしたね。じゃきと切って、こやぎたちがとび出した時、お母さんやぎはどう思ったでしょう。(うれしかった。喜んだ。パンザーイと喜んだ。よかった。)
- よかった、よかったって喜んで、みんなではねまわらないで、急いで石をつめたのは、どうしてなのですか。(子やぎが出たのに気づかれると大変だから。石をつめておくと、重くてよく歩けないから。また、来ると困るから。のどがかわいて水を飲みに来るから。)
- お母さんやぎは、この悪者のおなかの中に、石をつめておきましょう。と言いました。
15. ■お母さんやぎは、さとおなかを縫い合えました。あまり手早いので、おおかみはなんに

	も気づかず、身動きひとつしませんでした。
1 6.	Ⅱ おおかみはひとりごとに何と言いましたか。（おなかの中で、ごろごろ がら がら ころがるやつは なんだろう。）
1 7.	Ⅱ とぶ一ん。子やぎたちは喜んで？（おおかみ死んだ。おおかみ死んだ。）
1 8.	Ⅱ どんな気持ちでいどのまわりをまわっていると思いますか。（うれしい。もう来ないからいいもの。安心したよ。うれしくて踊りたい。）
1 9.	Ⅱ 七匹の子やぎはベットに入りました。お母さんやぎは無事だった子やぎをじっとみて、心の中で何と 思ったでしょう。（助かってよかった。よかった、よかった。ゆっくりおやすみ。） Ⅱ ほんとにみんな無事でよかったね。 ○ 余韻を残しながら、静かに閉じる。

よみきかせ 4 回目 ねらい……それぞれのセリフが言える。

○ よみきかせの時は、問いかけ、話し合いはなしに、黙って聞くことがしつけとして大切であるが、この場合は、次の劇ごっこへの発展のため、それぞれのセリフをよみきかせと一緒に言いながら、読み進めていきたい。

劇遊び ねらい……母やぎの愛情と、おおかみのずる賢さを表現できる。

- 見学する組、表現する組と分け、交代する。
- 役割決めする時に、おおかみになり手がいない時は、教師がやって見せるのもひとつの方法である。

「たしかめよみ」の回数がふえ、このことに興味を持つようになったら、「いつ、どこで、だれが、なにを、どうしたか」という「ことがら」の確めだけに終始しないで、子供たちのイメージづくり、そして、どう思い、どう感じたか、どう考えたか、などの体験の形成をなおざりにしてはいけないと思う。

例えば、11 場面をとると「お母さんどうしているの?」「泣いている」というやりとりで泣いているという「ことがら」は確められる。これだけでなく、母やぎの驚き、悲しみの心をどれだけ子供たちに体験させるか。また、驚き悲しんでいる母やぎの姿に対して、子供たちに深く同情させ、反面、おおかみの所業への憎しみをあらためて痛感させるという体験のさせ方「てだて」が大切である。

このことも教材研究につながることであるが、教材研究にあいまいさを残したまま実践に入ることにはよくない。グループによる徹底した話し合いをもつことが大切であると思う。それは、実践の結果を分析・評価するときに、例えば失敗したところが、教材解釈のあいまいさや誤りのためなのか、「てだて」などのまずさなのか、はっきりしないときがある。

教材研究の内容を含めて、このような観点でみることもできるのではないかと思い、少し詳しく書いた。次の「三びきのやぎのがらがらどん」のところでは、観点を少し変えてみた。

書名 三びきのやぎのがらがらどん (北欧民話, マーシャ・ブラウン え, せたていじ やく,
福音館書店)

北欧民話について

今から百年程前に、ペテル・クリステン・アスピヨルセン(1812~1885年)とヨルゲン・モオ(1813~1882年)というノルウェーの民話研究家によって、1834年頃から二人の共同の仕事がはじめられ、集められた。

特徴としては、大胆で、ほんとうの意味でユーモアをもっている。また、困難と危険のさなかに立つと、どんな事態でも最善をつくし、勇敢に敵とわたりあう、あの古代の北欧(ノルマン)人の性質があらわれてくる。

北欧民話には、必ずといってよいほどトロルとアシェラッドという二人の人物が出てくる。トロルは、山の中に群をなして住んでいる怪物である。朝早く森に出かけて女や子供をさらっていくのが仕事である。あまり利口ではない。物語によって、大男、巨人、小人、魔法使いの女になったりする。どの場合でも、鼻がとて大きく高いのが特徴である。アシェラッドは、ノルウェー語で「灰をいじる少年」という意味で、ノルウェー民話の主人公である。大変勇敢で、お姫様をさらうトロルを退治し、ほうびにお姫様と結婚するという話が多い。

作品について

ストーリーが、いかに簡潔に語られているかに注意しよう。ストーリーそのものに必要なところを除いては、細部は何も描かれない。ぎりぎりの精髓だけに切りつめられている。しかも、その動きの中に、環境と国民性が示されていて、それは紛れもない北欧的な感じを与えている。

物語は、激しい溪流が橋の下を流れ、その橋を渡るとエゾマツにおおわれた険しい山にいたるありさまは、文章からも暗示される。それが画面に的確に表現され、そのエゾマツの森をぬけたところに陽のいっぱいあたるやわらかい山の草場が描かれ、幼児には、びったりとこの話の舞台のイメージをおもいおこすることができるだろう。原色で大胆なリズムのある筆法で描かれているこの絵は、北欧の国の空気と地形のように澄んで力強い。また、「とびら」を見開きに使って、三匹のやぎを力強いタッチで描いてあるが、幼児はこれから始まる話の主人公の性格をある程度知ることができるのではなかろうか。大きいやぎの強たくましい姿に圧倒されるが、その眼はなんともやさしく、小さいやぎが頼りきって、安心しているらしいのが印象的である。頁をすすめていくたびに、「見返し」、「とびら」で受けた絵の印象が、話の進展に従い、確実にふくれあがり、幼児は、ドキドキしながらも、安心して物語の発展についていけるのではなかろうか。

物語の主人公の三匹のやぎは、恐ろしいトロルがいても山へ行かなければならない、というところなどは大胆でたくましい。幼児たちは、何回か繰り返し読んでもらううちに、小さいやぎの勇気や、大きいやぎの気迫を心のどこかに感じるのではないだろうか。このように、物語の登場者たちの大胆でたくましくがん固とさえうかがえる性質は、その状況とともに、私たちのいづくノルマン人の概念ともあっている。

この物語の形は、昔話の傑作のもつ簡潔さ、単純さ、力強さをそなえている。すなわち、よい作品に求める、力と客観性と抑制を具えた形である。長年にわたってたえず繰り返し語られたことが、ストーリーを語る効果的な方法を発達させ、それを保ってきた。つまり、必要で適切なことばだけが残っているのである。出来ごとと語句とを繰り返すことは、効果を高めるために昔話に使われる一つの方法である。

この話の魅力は、出来ごとの一つ一つがたがいに同じようでありながら、繰り返しのたびに少しずつ変る、というところにある。このように変化のある繰り返しを使うと、それは、読み手、または聞き手のがわに高まっていく興味と期待をもたせることになる。

結びの言葉、チョキン、パチン、ストン。はなしは、おしまい。は調子よく、はなやかに結ばれている。ナンセンスなはやし言葉は、あきらかに北欧の伝承的な結びである。

場面ごとの文と画面について

場 面	文	画
表紙	北欧民話 三びきのやぎのがらがらどん マーシャブラウン え せた ていじ やく	<ul style="list-style-type: none"> ・エゾマツにおおわれた険しい山、深い谷底、そこにかけてあるつり橋を渡る三びきのやぎのがらがらどん。 ・小やぎを先頭に、三匹とも歌を口ずさんで渡っている。 ・楽しそうな目や足の表情。
みかえし		
とびら 1.		<ul style="list-style-type: none"> ・エゾマツにおおわれた険しい山を遠くから見る。 ・太陽が光り、やさしさがある。山には花が咲き、暖さがある。
とびら 2.		<ul style="list-style-type: none"> ・おいしそうに草を食べている三びきのやぎ、大やぎ……堂々、雄々たる姿勢 中やぎ……やさしい表情 小やぎ……甘えて、大・中やぎに何か問いかけている。
とびら 3.		<ul style="list-style-type: none"> 中やぎも、小やぎも大やぎと目を合せている。 ・ハッピーエンドをつげるよううかれた小やぎの表情。（目、口もと、足）

1.	むかし、三びきのやぎが…… なまえは どれも がらがらどん…… あるとき、やま……くさば……ふとろうと ……のぼって……	<ul style="list-style-type: none"> ・溪流、エゾマツの険しい山、そのむこうに草を食べに行く。 ・くびを伸ばして希望の地を眺めている。
2. トロル	たにがわ……はし……わたら はしのした……トロル…… ぐりぐり めだまは さらのように つき でた はなは ひかきぼうのよう……	<ul style="list-style-type: none"> ・エゾマツの険しい中をようやく通りぬけて谷川にくる。 ・橋の下のトロルをみつけて三匹のやぎのギョッとした表情。 ・大・中やぎは、トロルを見つめ、小やぎは大やぎを見つめ、どうしようと泣きたい表情。 ・トロルはうで組みをし、片目だけあけて、えものあさりをしている。
3. 小やぎ	さて はじめに いちばん ちいさいやぎの がらがらど んが はしを わたりに やってきまし た。 かたこと かたこと と はしがなりま した。	<ul style="list-style-type: none"> ・つり橋をこわごわ渡る小やぎの表情(目)。 ・丸太を組んだ長い橋。
4. 小トロル 小やぎ	トロル だれだ おれの はしを かたこと さ せるのは 小やぎ なに、ほくですよ。いちばんちびやぎの がらがらどんです。やまへ ふとりに いくところです。とても ちいさいこえ トロル ようし きさまを ひと刀みにしてやろ う。	<ul style="list-style-type: none"> ・つり橋の上で小さくなって、おびえている小やぎ。 ・右下に大きく顔を出すトロル、目玉、長い鼻のこぎり歯 ・小やぎを小さく、トロルを大きく表現
5. 小トロル 小やぎ	小やぎ ああ どうか たべないでください。ほ くは こんなに ちいさいんだもの す こし まてば 二ばんめの やぎの が らがらどんが やってきます。ほくより ずっと おおきいですよ。	<ul style="list-style-type: none"> ・小やぎを大きく、トロルを小さく表現。 ・耳をさげて哀願している。ギョッとした目、クリクリした驚きいっぱいの小やぎ。 ・右はしの下にトロルの目と長い鼻。 ・橋の上と下の表現。

	<p>トル</p> <p>そんなら とっとと <u>いってしまえ</u>!</p>	
6.	<p><u>しばらくして</u></p> <p>二ばんめの やぎの がらがらどんが はしを わたりに やってきました。 がたごと がたごと と はしが なり ました。</p>	<ul style="list-style-type: none"> 谷川にかかった高いつり橋，エゾマツの間をぬう道，岩。 中やぎ，少し雄々と，しかし，目は橋の下にそそがれている。
7.	<p>トル</p> <p>だれだ おれの はしを がたごと さ せるのは</p> <p>中やぎ</p> <p>ぼくは 二ばんめの やぎの がらがら どん。やまへ ふとりに <u>いくところだ</u>。 まへの やぎほど <u>ちいさいこえでは</u> <u>ありません</u>。</p> <p>トル</p> <p>ようし，きさまを <u>ひとのみにしてやる</u> <u>ぞ</u>。</p>	<ul style="list-style-type: none"> 右足をピンとあげ，へへんといった表情の中やぎ トルは今度，橋のむこう側に表す。なにもかも大きく表現，橋にグッと力強くおいた手には，中やぎをひとのみしてやろうという感がある。
8.	<p>中やぎ</p> <p><u>おっと</u>，たべないで <u>おくれよ</u>。すこし まてば おおきいやぎの がらがらどん が <u>やってくる</u>。ぼくより <u>ずっと</u> お おきい<u>よ</u>。</p> <p>トル</p> <p>そうか そんなら とっとと <u>きえうせ</u> <u>ろ</u>。</p>	<ul style="list-style-type: none"> トル鼻をたれて欲望をおさえている目 ヤーイ、だまされたか。次に来るのはすごいのだぞ……という表情。うしろ足をピンとはねて走り去って行く中やぎ。 トルを左下へ，中やぎを右はしに，今までの位置を変える。
9.	<p><u>ところがそのとき</u></p> <p>もう やって きたのが おおきいやぎ の がらがらどん</p> <p>がたん ごとん がたん ごとん がたん ごとん がたん ごとん あんまり やぎが おもいので はしが きしんだり うなったりしたのです。</p> <p>トル</p> <p>いったい ぜんたい なにものだ，おれ</p>	<ul style="list-style-type: none"> 力のすべてを貯えた姿勢，角をまるめ，背中を伸ばし，肩をぐっといからせた大やぎ。 つり橋も力強く，大やぎに対応。 うしろにのけぞりぎみのトル，鼻をつき出し，目をギョロつかせているが，口元には，驚きの表情がある。 山もエゾマツも表さず，大きい二つの対決だけを表現。

	の はしを がた ^ぶ し ^さ せる やつは	
10. 大 や ぎ	大やぎ おれだ。／おおきいやぎの がらがらどん だ。／ ひどく し ^ゃ がれた がらがらごえ	<ul style="list-style-type: none"> 画面からはみ出している大やぎの顔の表情、えただかにほえたてている。目、角、口、ひげ、顔だけで、他は一切書かれていないが、それがかえって大やぎの力強さを表す。また、みひらき一杯に表現している。 声の大きさ、力強さを文字に表現。
11. 大 ト や ロ ギ ル	トロール ようし それでは <u>ひとのみにして</u> く れるぞ。／ 大やぎ さあこい。／ こっちにゃ 二ほんの や りがある。これで めだまは でんがく ざし。おまけに おおきな いしも 二 つある。にくも ほねも こなごなに ふみくだくぞ。／ (めくりながら) こう おおきいやぎが いいました。	<ul style="list-style-type: none"> 大やぎを左頁全部に表現。 とてつもない力と、勢いを背中、鼻息、爪、前足、角、大やぎの体のまわりに黄色でかいてある土煙、線で表した毛。 トロール 右はしへ、両手を前に出して身構える。鼻、目、口の表情。
12. 大 や ぎ	大やぎ そして トロールに とびかかると つの で めだまを くしぎしに ひずめで にくも ほねも こっぱ みじんにして トロールを たにがわへ つきおとしまし た。	<ul style="list-style-type: none"> 谷川、急流、一本のつり橋。 こっぱみじんになったトロールの肉片。 大やぎの活躍のすごさを、トロールの肉片が円をえがいてまわっているのに表現、ひづめの強さを、立ちあがった前足に表している。
13.	それから やまへ のぼって いきました。	<ul style="list-style-type: none"> 左下すみの、はるか遠くに見える谷川とつり橋は時間の経過を表す。 エゾマツの険しい山を通り抜け、草のある目的地に着いて、喜んでいる三匹のやぎたち。 小やぎの甘えと喜び。 中やぎは、大やぎをみて喜んでいる。 大やぎが、先に来ている小・中やぎに追いつこうと急ぎ足。 西に陽が傾いた、光が、時間の経過をあらわす。
お く	やぎたちは とても ふとって…………… そこで チョキン パチン ストン。	<ul style="list-style-type: none"> 三匹のやぎのおもそうな腹、足に力を入れて草を食べている。幸せいっぱい。／

づ け	はなしは おしまい。	
み え か し		・エゾマツの険しい山々，深い谷川，むれ遊ぶ やぎたち，山奥の物語。

目標

- 絵に表現されている物語の楽しさや，リズムカルな言葉や繰り返しの言葉の面白さを読みとることができる。

だんどり

Ⅱ やぎを知っていますか。

Ⅱ ほら、こんな動物なの。

○「とびら」に描かれている三匹のやぎの姿を見せ，自由に話させる。

Ⅱ みんな名前は，「がらがらどん」というのです。さあ，この三匹のやぎのがらがらどんは何をするのだと思いますか。

○自由に話させ，物語の内容に近い子供，2・3人に話させてみる。

Ⅱ この本のお話はどのようなのでしょうか。あたっているかもしれません。それでは，本を読みます。

よみきかせ 1 回目 ねらい……リズムカルな言葉や，繰り返しの言葉の面白さを読みとることができる。

場 面	て	だ	て
表 紙	Ⅱ 三匹のやぎのがらがらどん，北欧民話，マーシャ・ブラウン 絵，瀬田貞二 訳		
見返し	○本文に入る前に 4 場面もあるが，三匹のやぎの物語の舞台，これからはじまるお話の主人公の性格がうかがえる場面である。文章がないからとおろそかにせず，場面ごとに，		
とびら	ていねいに見せ，三匹のやぎの物語の中にさそいこむ。		
1・2	○淡々と読む。		
3・4	○やぎとトロルのやりとりが続くところは，「……と……が，いいました」という文は，はぶいて，タイミングよく運んでもよい。		
3～10	○三匹のやぎの橋を渡る時にたてる音の違い，三匹のやぎの声の違いは，大きさにならない程度に，それぞれ区別して表現する。		
6	○しばらくして……の感じを出すよう，ゆっくりめくる。		

9~12	○大きいやぎが、橋を渡ってやってくるところから、トロルと一騎討ちにかけては、さつとめくって、やぎがトロルにとびかかる勢いを出す。
14	○結びの言葉、チョキン・パチン・ストンは、調子よく読んで結ぶ。

よみきかせ 2回目 ねらい……リズムカルな言葉，繰り返しの言葉を，読みきかせに合せて言える。

○留意することは，1回目と同じ。

たしかめよみ 1回目 ねらい……三匹のやぎが，橋を渡る音の違いが言える。

場 面	て だ て
3・6 9	<p>Ⅱ 三匹のやぎのがらがらどんが，橋を渡る時，どんな音がしましたか。</p> <p>Ⅱ 一番小さいやぎの時は，どんな音がしましたか。</p> <p>Ⅱ 二番目のやぎの時は，どんな音がしましたか。</p> <p>Ⅱ 大きいやぎの時は，どうでしたか。</p> <p>○ 3・6・9場面の絵をみせ，読んでやり，子供たちの発言どおりであったかどうかを確認する。</p> <p>Ⅱ 手で床をはたいて，やぎの歩く音をだしてみよう。</p> <p>○ 一番小さいやぎの歩く音は？ 二番目のやぎは？ 大きいやぎは？ といって床をはたかせてみる。</p> <p>Ⅱ 今度は，足踏みして三匹のやぎの歩く音をだしてみよう。さあ，用意はいいですか。</p> <p>Ⅱ 一番小さいやぎの歩く音です。さあ，どうでしょう。</p> <p>○ 二番目のやぎの音は？ 大きいやぎの音は？ といって，足踏みしながら，それぞれの音の違いを出させる。</p> <p>Ⅱ それでは今度は，歩いてみましょう。</p> <p>○ 三度目でもあるし，はじめは黙ってさせてみる。</p>
11 17 18	<p>Ⅱ みんなは，大きいやぎのがらがらどんです。先生がトロルです。</p> <p>○ 橋を書き，その範囲内で一騎討ちをする。</p> <p>○ 11場面から18場面のよみきかせをする。</p> <p>○ トロルごっこをすることを話し合い，次回への期待をもたせる。</p>

たしかめよみ 2 回目 ねらい……三匹のやぎやトロルを身体表現できる。

て	だ	て
<ul style="list-style-type: none"> ○保育室内に三匹のやぎのお面，トロルのお面を数個ずつ用意する。 ○大型積木などを使って橋をつくり，谷川の場면을構成し，子供たちが自由にならでん遊びができるようにしておく。 ○橋を渡る音を打楽器を使ってださせる。 ○トロルとの対決場面を，ピアノや太鼓の音で，緊迫した雰囲気をもりあげる。 ○役の交代，なり手の少ない役に教師になるなど，遊びに変化をもたせていく。 ○十分楽しませたところで Ⅱ さあ，みんな，山へ登っておいしい草をいっぱい食べましょう。 ○少し落ち着いたふんい気にさせる。 ○全文をよみきかせる。 		

繰り返しの対比だけを特にぬき出してみる。

項 目	小さい やぎ	中くらいの やぎ	大きい やぎ
場面転換	さて はじめに	しばらくして	ところが そのときもう
橋の音	かたこと かたこと	がたごと がたごと	がたんごとん がたんごとん がたんごとん がたんごとん
トロルと の対話①	「なに ぼくですよ。」	「ぼくは 二ばんめのやぎの がらがらどん。」	「おれだ。／ おおきいやぎの がらがらどんだ。／」
やぎの声	とてもちいさいこえで	まえのやぎほどちいさいこえ ではありません。	ひどくしゃがれた がらがら こえでした。
トロルと の対話②	ああ どうかたべないでく ださい。	おっと たべないでおくれよ。	さあ こい。／
トロルの 言葉	だれだ おれのはしを かたこと させるのは。	だれだ おれのはしを がた ごと させるのは。	いったいぜんたいなにものだ おれのはしを がたびしさせ るやつは。
	――― ようし きさまをひとのみ にしてやろう。	――― ようし きさまをひとのみに してやろう。	――― ようし それでは ひとのみ にしてくれるぞ。／
	――― とっとと いってしまえ。	――― とっとと きえうせろ。	

書名 おばけとももちゃん (松谷みよ子 文, 中谷千代子 絵, 講談社)

作品について

ちいさいモモちゃんシリーズの中のひとつである。ちょっとこわいが、のぞいてもみたいおばけをテーマに、さらにそれをアイドル化してしまう現代っ子のお話である。

目標

モモちゃんの気持ちになって、お化けの世界を楽しむことができる。

だんどり

- 物語の中に出てくるお化けを立体化してぶらさげる。
- 5場面の絵だけを出す Ⅱ先生が先にお化けにひとこと言うから、みんなはその後、お化けにひとことお話して下さい。 Ⅲお化けだぞう。ひと玉だぞ。 ◦この後、自由に言わせる。
- Ⅱモモちゃんは、お化けとどんな話をしたのでしょう。

よみきかせ 1回目 ねらい……次々と出てくるお化けをモモちゃんがどうするか想像しながら聞くことができる。

- モモちゃんの会話の部分は、少し早目に読む
- 3場面、モモちゃんは……「……どこですかあ」までの文と文の間は十分<ま>をとる。
- 4場面、驚きの気持ちで読む。
- 5場面から9場面のモモちゃんのことばは、平然として子供の気持ちで読む。お化けの言葉は、くやしいという怒りをこめて読む。
- 9場面から10場面に移る<間>十分にとる。
- 10場面、お化けたちは、くやしがってワアワアなきました。ゆっくり読んで、絵をみせて終る。

よみきかせ 2回目 ねらい……モモちゃんになって、お化けとお話ができる。

- 留意することは、1回目に同じ。

たしかめよみ ねらい……自分で考えたお化けをペープサートに作ることができる。

- 6場面をだす。
- Ⅱひのたまお化けをこわがらないモモちゃんに、なんとかして、キャーといわせたくてお化けたちが相談しているところですね。このほかにもみんなの考えたお化けを作って、モモちゃんをキャーといわせましょう。
- お化けのペープサートができた者から集まって、お化け遊びをする。

書名 わたしのワンピース（西巻 茅子 文と絵，こぐま社）

作品について

窓から舞い下りてきた布で、うさぎの女の子が作った真白いワンピースは、不思議なことに、花畑に行くと花模様になり、雨が降ってくると水玉模様に、草原では草の実模様にと、ワンピースはいろいろに変化して、美しいファンタジーの世界をくりひろげる。子供たちの想像力を刺激するストーリー、口ずさみたくなるリズムカルな言葉、子供たちが自分にもえがけそうだな……と思うような、単純な線とフォルムの絵は、子供に親しみやすく、黄、ピンク、緑、藍などの明るい色彩の中にも落ち着いた感じがする。

なにげない絵本のようにであるが、よく見ると心にくいばかりの配慮がうかがえる。

- ・三拍子のリズムで模様の変化が繰り返されている。（三拍子，四小節）
- ・それぞれの第1の場面で，次の模様になるモチーフとの出会いを予測させるように右の上のすみにそれが描かれている。
- ・空の場面では，今までの描き方を変化させ，模様も空の一部を三角の中へ取り入れた，という表現である。
- ・最後のしめくくりの場面だけ，左頁の絵になっており，星の模様のうさぎが流れ星になって，地上におりたことを素直に受けとめることができる。
- ・模様の変ったところでは，バックに色を使って白を印象づけ，模様をうきたたせている。
- ・小鳥の模様になって，空を飛んだり，星模様と流れ星の数が同じであったり，繊細な感覚をうかがうことができる。

全体として，絵がストーリーを運んでおり，そこへ，リズムカルなことばが絵の中にとけこんだようにつくられている。

このような，細い心くばりが，幼児への愛情という本づくりの姿勢をも感じさせ，うさぎと一体となって，何々の模様のワンピースを着てみたいな，と思わせるのではなからうか。

目標

- 1枚のワンピースの模様が，その時々まわりの様子にあわせながら変っていくことを読みとることができる。
- 繰り返しの文章に気がつき，リズムのある言葉をみんなと一緒に言える。

だんどり

お花畑の用意。壁面に紙で作った大型の白のワンピースを添付しておく。

Ⅱ「きょう，先生は，お花の模様のワンピースを着てきました。お花畑に座りましょうか。どう？「にあうかしら」

よみきかせ 1回目 ねらい……ワンピースの模様の変化を期待しながら聞ける。

Ⅱわたしのワンピース。絵と文、にしまき かやこ、こぐま社

◦まわりの様子にあわせながら模様が変わっていくところでは、次は、こんな模様だな、と、子供が考えられる<間>をもたせてめくる。

◦「にあうかしら」「ミシン カタカタ」「ラララン ロロロン」「ラララン ロロロン ランロンロン」の言葉は、特にはっきりと、子供に印象づけるように読む。

◦5, 8 場面の「あれっ」 11, 14 場面の「あらっ」の言葉は、子供がこの場面を見た瞬間(子供は心の中で「あれっ」と思うだろう。それと同時に)に、読むようにする。

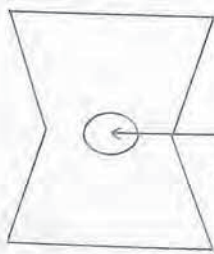
よみきかせ 2回目 ねらい……リズムカルな言葉(ラララン ロロロン……わたしににあうかしら)を、よみきかせにあわせて、口ずさむことができる。

◦留意することは、1回目と同じ。

よみきかせ 3回目 ねらい……まわりの様子の変化にともなって、ワンピースの模様が何に変わっていくかを言える。

◦留意することは、1回目と同じ。◦よみきかせ3回目になれば、子供は文章を覚えてしまっているかもしれないが、模様のかわりめの場面の右頁上か下に暗示されていることに注意し、黙って指でさすようにする。

たしかめよみ ねらい……まわりの状態にあわせて、わたしのワンピースをデザインできる。

て	だ	て
<p>Ⅱわあっ、雨が降ってきたわ。 Ⅱどんな模様のワンピースになるでしょう。雨がさをさしながらいう。(絵本のとおりであるならば、水玉模様になった。とか、ラララン、ロロロン 水玉模様のワンピース、わたしに にあうかしら。 ところが先生が雨がさをさしながら話しかけたのだから、かさの模様とか、こうもりの模様といえ、次の活動は、スムーズにいくだろう。)</p>		
 <ul style="list-style-type: none"> ・大洋紙白 ・かぶる ・ワンピース丈はミニ・ロングとりませる 	<p>Ⅱこれを見て下さい。真っ白いわたしのワンピース。にあうかしら。</p> <p>Ⅱラララン ロロロン わたしは遊びにきました。わたしのワンピースに模様を書いて下さい。魚がたくさん泳いでいる池をのぞきました。さて、ワンピースの模様はどんなに変わるでしょう。</p>	

- デザインされたものが何であるかを子供に聞いてみる。状件とかけはなれたのがあったら、うまくやりなおさせる。
- 出来上がった子供には、もう一枚デザインさせる。（Ⅱラララン ロロロン くだもの畑にとんでいきました。さあ、わたしのワンピースの模様はどうなるかな？）（グループ別ぐらいに、状件を変えてみるのもよい。）
- Ⅱさあ、出来上りました。うさぎさんは何といたしますか？（あれっ ワンピースがお魚の模様になった。ラララン ロロロン わたしに にあうかしら）
- Ⅱみんな、そのワンピースを着て踊りましょう。
- その場で、ラララン ロロロン ランロンロン ラララン ロロロン ランロンロン……と。
- その他、デザインは、画用紙にさせ、切り抜いてうさぎに着せて踊らせるなど。まわりの状件も子供に言わせるなどもよい。

書名 ぐりとぐら （なかがわりえこ 文， おおむらゆりこ え， 福音館書店）

作品について

この作品は、とても大きい卵を見つけることで話が展開するが、そこで幼児の興味をひきつけ、そこから、次は？ 次は？と期待をもって聞いていくことができる。また、リズムカルな歌や言葉が、はっきりした絵と一体になり幼児に親しみをもたせる。そして、歌ったり、動作化をすることをとおして、主人公の気持を共体験することができる。

色彩が明かるく、遠目がきき、絵だけみてもストーリーが分かり、ぐりとぐらの話しが聞こえてくるように生き生きと描かれている。

森の中の仲間には、「いやいやえん」のまのやまのこぐまちゃんやおおかみ、「かえるのエルタ」のらいおんみどりやエルタを登場させ、子供がそれを発見するであろうことを作者は期待しているかのように思われる。

2匹の野ねずみを主人公にして、大きい卵の発見、食べても食べてもまだ残っている大きいカステラづくり、カステラののにおいに誘われて、森の動物達が集まってきて、みんなで分けあって食べる、そのあと大きい卵のからで自動車をつくっていく。型は直線型であるが、子供の心を引きつけ、楽しい気持ちにさせ、「ああ、面白かった。楽しかった。」と、子供の心に満足感がひろがるような組み立になって

いる。

目標

- うたったり、動作化したりして、主人公の気持を共体験できる。
- 絵を見て、部分的に説明できる。

だんどり

- どんぐりの実、くりの実、丸太、切り株のいすを用意。(林や公園などでよみきかせすることもよいが、子供の気が散らないように注意する。)
- ぐりとぐらの歌をうたう。
- ぐりとぐらのお話を知っている人はいませんか。知っている人にお話してもらいましょう。
- 教師はその場面を出していく。
- 何が出てくるのですか。(ねずみ、ぐりとぐら)
- どこへ行ったのですか。(森、木のあるところ、山)
- 何を拾ったのですか。(卵、大きな卵)
- 持ってこられないので、山でおいしいものを作りました。何ですか。(カステラ)
- そのカステラをどうしましたか。(動物と食べました。)

よみきかせ 1回目 ねらい……絵を見ながら、話のあら筋の大体を言える。

- ぐりとぐらの歌をうたう。
- 1場面ずつ、ゆっくりと絵を見せ、自由に話させる。話が出にくい時は、本文の言葉が出てくるように発問していく。
- あしたは、みんなの話したことと、この本のお話と比べこしましょう。

よみきかせ 2回目 ねらい……お話を聞いて、自分の好きな場面がいえる。

- 表紙を見せ、ぐりとぐら、なかがわりえこ 文、おおむらゆりこ 絵、と読み、ゆっくりと、裏表紙を出す。話の展開の中の部分がでる。
- ぐりとぐらの歌のところは、自然にうたいだす程度で、全員でうたうことを強制しない。
- 2場面から(みちのまんなかに、とてもおおきな)3場面に移る時、＜間＞を十分にとってからめくる。
- P8、P9は5. 6場面になることに注意する。この場面では、大きい卵の運び方が問題になっているから、子供なりに考える余裕を与えて次へ進むようにする。
- 10場面のぐりとぐらの歌は、1場面に同じに取り扱う。
- 13場面………とても おおきい たまごの からだけでした。＜間＞この間に、森の動物達が舌なめずりをしながらカステラを食べている様子をよく見せる。そのあとで、■ さあ、このからで、ぐ

りとぐらは、何を作ったと思いますか。○自由に考えさせ、問答はしない。そして、静かに次頁へいく。

○14 場面、どこへいくのだろう。余韻を残し、『ぐりとぐらのお話は終わります。

たしかめよみ ねらい……ぐりとぐらがカステラを作る楽しみを体で表現できる。

て だ て

『ちょっと聞かせて下さい。ぐりになりたい人。ぐらになりたい人。森の動物になりたい人。

○お面やぼうしをかぶり、グループにわけておく。

○ぐりとぐらの歌をうたう。

○カステラづくりまでのあら筋を、ナゾナゾでといていく。

『のねずみ2匹、森の中で大きな卵を拾いました。はて、誰でしょう。(ぐりとぐら)

『あんまり大きい卵で運べません。どうしましたか。(うちから、おなべ、こむぎこ、ばたー、ぎゅうにゅう、おさとう、ぼーる、あわたてき、えぶろん、まっち、りゅっくさっくをもってきて、森でカステラを作りました。

『そうでした。では、これから、ぐりとぐらになって大きなカステラを作しましょう。

『ぐりとぐらの歌をうたいながらカステラづくりの用意をしましょう。保育室の一角に用意してあるものを中央にしつらえる。

『一番先にぐりとぐらのやったようにはじめましょう。(卵を入れて、おさとうを入れて、かきまぜて、牛乳と小麦粉を入れて、かきまぜて……おなべにバターをぬって、ジュース、ボールの材料を入れて)(ぐらは、かまどをつくり、木を拾う。)

『できあがるまでうたいましょう。(ぐりとぐらの歌をうたう。)

○動物達が、次々と出て来て、木の切り株や、丸太に腰をおろし、一緒にうたう。

『さあ、カステラが出来上がったところです。

○ぐりとぐらにセリフを言わせる。驚き、喜びの言葉や態度ができればよい。

○みんなでカステラを分けて食べる。みんなにカステラの味や大きさ、喜びについて、自由にセリフを言わせる。

○18 場面 そのおいしかったこと、／＼……からだけでした。までを、ゆっくりと読んで終りにする。

たしかめよみ ねらい……卵のからでつくりたいものを絵に表現できる。

『ぐりとぐらは、車をつくったけれど、みんなだったら何をつくりですか。描いてみましょう。

たしかめよみ ねらい……ぐりとぐらの続き話を絵に表現できる。

Ⅱぐりとぐらは、卵の車に乗って、どこへいくのでしょうか。

この他にも展開は考えられる。ここにあげた「たしかめよみ」を全部しようというのではない。子供が喜ぶものを1つだけ取り上げればよい。たった1つのことを用意しておくことよりも、子供が発想するであろうことを何通りか用意しておけば、無理に教師の線に引き入れることをしなくてもすむと思う。

もうひとつ大事なことは、目標達成のために、どの方法が一番良いかを決めること。そのためにいくとおりかの方法を考えてみることも必要であろう。

書名 おだんごばん (ロシア民話, せたていじ やく, わきたかず え, 福音館書店)

作品について

おばあさんが、粉箱の底をごしごしひっかいて、集めた小麦粉で作ったおだんごばん。焼き上ってさましているすきに、窓からころんと逃げだした。途中、うさぎ、おおかみ、くまに食べられそうになるが、巧みにかわして、川のふちまでくる。そこで、きつねのおせじと親切にだまされ、とうとうぱく々と食べられてしまう話。リズムカルな歌のくりかえしが、お話を盛りあげ、クライマックスであっけなく終る単純、明快さが子供に喜ばれる。また、おだんごばんが、ころがり出て動物にあっていくというくり返しを持った文章である。そのために子供は、次の頁に期待しながらスリル感も味わうことができる。

1頁、1場面という場面構成のところが多いが、それがかえっておだんごばんの姿を追うことに興味をもたせる役目をしているのではないかと思う。

物語のところどころに登場する小鳥の表情が読者に何かを語りかけているようである。全体に茶を主体とした色調は、子供にゆったりした落ち着きを与える絵本である。

目標

○おだんごばんのゆくえに興味をもち、繰り返しの文や、おだんごばんの歌をうたうことができる。

だんどり

●おだんごばんの歌をテープに吹きこみ、それを静かに流す。

表現を見せ、自由に話させる。教師は、黙って聞いてやる。

Ⅱ これ、おだんごぼんです。おじいさん、おばあさん、うさぎ、くま、おおかみ、これはきつね、みんなおだんごぼんをじっと見ているわね。さて、どうしてなのでしょう。＜間＞では、読みますよ。

よみきかせ 1回目 ねらい……おだんごぼんが、ころころころがって、どこへ行ったかが言える。

- 場面へ移る時＜間＞をとり、おだんごぼんのゆくえを子供に考えさせる。
- リズムのある言葉は、特にはっきりと印象づけるように読む。
- おだんごぼんの歌のところは、歌うように読み、くまと出合うあたりからは、歌う。
- 画面に表現されているおだんごぼんの表情、登場する動物の表情、鳥の表情をよくみせる。
- 文章のない画面は、特にゆっくりと見せ、子供のイメージをふくらませる。例えば、2場面は、子供たちに自由にイメージをもたせる。そして、3場面に書いてある文章を読んでもらうと、そうだったのか、と思ったり、やっぱりそうだった、と思ったりして、次の事柄に期待をもつようになるのではなからうか。きつねに出合う場面もそうである。画面が先にあって、文章があとにあるというのは、それだけに大きな意味があると思う。
- おだんごぼんがころがって、どこへいくのだろう？ 動物に会った。食べられる。大変だ。あー助かった。こんどは？また助かった。という具合に、短い場面ごとにこのような気持ちを起こさせるには、＜間＞のとり方を十分に工夫する。

よみきかせ 2回目 ねらい……おだんごぼんの歌をみんなでうたえる。それぞれの動物が、おだんごぼんに語りかける言葉を、教師のよみきかせに合わせてつぶやくことができる。

- おだんごぼんの歌をうたう。その他、留意することは、1回目と同じ。

たしかめよみ （A案）ねらい……粘土でおだんごぼんを作り、それを転がしながら、おだんごぼんの歌がうたえる。

て だ て

Ⅱ おだんごぼんの歌をうたいながら、よーく よーく こねましょう。

- 旗立ての棒のところに、うさぎ、おおかみ、くま、きつねを書いたものを用意しておく。それを適当な所に並べ、問いに対して、おだんごぼんを転がしてやる。

Ⅱ おだんごぼんが、一番先に出合ったのはだれですか。（うさぎ）

Ⅱ うさぎさんは、何といいましたか。（おだんごさん、………たべてあげよう）

Ⅱ そうしたら おだんごぼんは何といいましたか。（ぼくは………にげだすよ）

- 転がしながら、問いに答えていく。

Ⅱ 次にあったのはだれですか。（おおかみ）

Ⅱ その次はだれに会いましたか。(くま)

Ⅱ 最後に会ったのはだれでしょう。(きつね)

○ 画面を見せ、うさぎ、おおかみ、くま、きつねと会ってきたことが正しかったかどうかを確かめる。

Ⅱ きつねは、おだんごばんに何かうまいこと言いましたね。何と言いましたか。

○ 子供と一緒に言う。(ごきげんいかが、おだんごさん。なんとあなたはきれいで、なんてほかほかやけているんでしょう。)

Ⅱ おだんごばんは、その言葉を聞いて、どんな気持ちになったでしょうか。(うれしくなった)

Ⅱ そして、そのあとで何か得意なことを言いましたね。一緒にうたってみましょう。

Ⅱ きつねの鼻の上で、またうたいましたね。(ぼくは……にげだすよ。)

○ 画面を見せ、確かめさせる。そして、ゆっくりと終りの文章を読む。きつねさんが、したをべろりとだします。……とびあがり……たちまちくちをとじ、……ぱくっとたべて……。)

たしかめよみ(B案)ねらい……鬼ごっこをしながら、繰り返しの言葉が言える。

て だ て

○ おだんごばんの歌をうたいながら遊戯室を走り回る。

○ おだんごばん、うさぎ、おおかみ、くま、きつねとグループ分けをしてお面をつける。

Ⅱ おだんごばんが一番先に会った動物、ここまでおいで。

○ 次々に集める。

Ⅱ おだんごばんのお話では、追いかけるほうはどっちでしたか。(動物、うさぎ)

Ⅱ おだんごばんと会った動物は何と言いましたか。(おだんごさん……ぱくりとたべちゃうぞ。)

Ⅱ そうしたら? 次々言ってみましょう。(そうはできないよ。……うたをきかせてあげる…)

○ 動物……(おだんごさん、おだんごさん。きみを ぱくりと たべちゃうぞ。)

○ パン……(ぼくは てんかの おだんごばん……おまえなんかにつかまるかい。)

Ⅱ おだんごばんが、つかまるかいと言って逃げていくのを、動物は、じっと見ているだろうか。

(追いかける)

Ⅱ きょうは、おだんごばん、動物に分かれて鬼ごっこします。

○ ある距離をとり、お互いが言葉をかわしながら、おだんごばんの歌が終ってから追いかけてこずることを約束する。

○ つかまったら、相手側のお面をかぶり、鬼ごっこを続ける。

たしかめよみ（C案）ねらい……もし自分がおだんごばんだったら、どこへころがって行きたいのか想像して絵に表現できる。

て だ て

○ペープサート（うさぎ、おおかみ、くま、きつね）グループ分の用意。

■ おだんごばんの歌をうたいましょう。粘土をこねる。

■ おばあさんが麦粉で練ったおだんごばんは、ころころ、ころころ転がっていく途中に、どんな動物に順々に会ったでしょう。会った順にペープサートを並べてみましょう。

○点検する。

■ このグループの人は、3番目に会った動物の前で、おだんごばんの歌をうたいましょう。

○グループごとに、何番目という言い方で動物を指示する。

■ では、みんなの作ったおだんごばんは、ころころ ころころ転がって、どんな所へ行きたいのか、画用紙に描いてみましょう。

○自由に描き、終わった子供から教師に話してきかせる。

○代表が全員に話してみるのもよい。

○きつねとの出会いとの場面をよみきかせする。

■ おだんごばんの歌をうたいましょう。

書名 三びきのこぶた （イギリス昔話、瀬田貞二 訳， 山田三郎 画， 福音館書店）

作品について

貧乏で子ぶたを養いきれなくなった母ぶたは、自活の道を求めるようにと三匹をよそへ出す。初めの子ぶたはわらの家、二番目の子ぶたは小枝で家を作るが、いずれもおおかみに吹きとばされ、食べられてしまう。れんがの家を建てた三番目の子ぶたは、何度かおおかみにさそいだされるけれども、とっさの知恵で運よく難をのがれ、ついにおおかみを退治してしまう。イギリスの古典民話の味を生かした文の構成と、リアルなさし絵が評価の高いものになっているようである。

文の構成をみると、＜ぶたは……のひとにあいました。そこで、こぶたは、たのみました。「どうかその……をください。いえをたてるんですから」そのひとは……をくれたので、こぶたは……でいえをたてました＞の3回繰り返してである。

……は、「わら」であり「きのえだ」であり「れんが」である。

おおかみは悪役であり、二場面とも＜「こぶた、こぶた、おれを入れてくれ」……………「それじゃ、ひとつ、ふうふうのふうで、このいえ、ふきとばしちまうぞ」ふうふうのふっといえをふきとばして、こぶたをたべてしまいました。＞となっている。

目標

登場人物の性格や行動の面白さ、繰り返しの文章の面白さを読みとることができる。

だんどり

- 表紙を見せ、自由に話させる。
- 本によっては、最後、おおかみが逃げていくのと、死ぬのと二通りあるが、子供たちの知っているのはどちらかを確認する。
- 腰にさげている袋の中に入っているものを想像させてみる。
- Ⅱ一番、利口だと思うこぶたは、何で家を建てたこぶただと思いますか。
- Ⅱどうして利口だと思いますか。
- Ⅱみんななら、何で家を建てますか。そして、どうやっておおかみを退治しますか。

よみきかせ 1回目 ねらい……三匹のこぶたがそれぞれ何で家を造り、それぞれのこぶたの最後はどうなったかを読みとることができる。

Ⅱ三びきのこぶた イギリス昔話 瀬田貞二 訳、山田三郎 画。

- 1場面のむむかし、あるところに、……………三びきをよそにだしました」を読んでから、1場面を出す。
- 1場面から2場面に移る時、ゆっくりとめくり、何が起こるかを考えさせる。
- 3場面のはじめは絵を見せないで、「つぎの……………こぶたは、えだでいえをたてました。＜間＞すると」ここで画面をみせ、終りまで読む。
- 4場面では、「三ばんめの……………をはこんでいるひとにあいました。」＜間＞をとり、はじめのこぶた、次のこぶたのことから考えて、どうなるかを想像させる。
- 「こぶた、こぶた……………ふうふうの ふっと、やりましたが、」までを一気に読む。このあと、十分に＜間＞をとり、家がどうなったかを考えさせる。そして、「どっこい、いえがふきとびません」と読んでいく。
- 5場面は、3場面と同じように、右頁上段にある文章は、画面を見せないで読んでやる。左頁下段の文章を読む時に画面を見せる。

- 6 場面では、「さあ、こぶたは、どんなにびっくりしたことでしょう」で＜間＞をとり、どんなに驚いたかを想像させる。
- 7 場面では、まず、お祭りのにぎやかさをじっと見せる。
- 「ばた一つくりのたるをかってもちかえろうとしました。」で＜間＞をとり、なんのためのたるなのかを考えさせ、次頁へ移る。
- 8 場面では、右頁だけを見せる。そして、右頁の「すると、……………きもをつぶしたと、はなしました。」左頁の「すると、……………さかをころがりおりたのさ。」まで読む。
- 「これをきくと、」を読みながら左頁の画面を出す。
- 9 場面では、いい気味だというこぶたの表情をよく見せる。
- 「……………たべてしまいました。」＜間＞「それからこぶたはずっとしあわせにくらしました。」
- 全体として、くり返えされる言葉は印象づけるように読む。
「どうか、その……………くださいな。いえをたてるんですから」「こぶた、こぶた、おれをいれとくれ」「だめ、だめ、だめ。めっそうもない。」「そいじゃ、ひとつ、ふうふうのふうで、このいえ、ふきとばしちまうぞ」

よみきかせ 2 回目 ねらい……………繰り返えされる言葉を、よみきかせにあわせて口ずさむことができる。

- 留意することは、1 回目と同じ。

たしかめよみ ねらい……………こぶたがどうやっておおかみから身を守ることができたかが言える。

て だ て

- はじめのこぶたは、何で家をつくったのでしょうか。
- 次のこぶたは、何で家をつくりましたか。
- 三番目のこぶたの家は何でつくりましたか。
- おおかみに食べられなかったのは、れんがで家をつくったためですか。
- 教師の考えていることに合致させようとしないで、自由に話させる。
- この時も、この時もしょうずにおおかみから逃げられましたね。
- かぶとり、りんごとり、お祭りの場面を見せる。
- かぶとりに行こうといわれた時、こぶたは、おおかみより早かったの遅かったの？
- そう、早く行ってきたので助かりました。その次のリンゴの時は、どうしましたか。
- お祭りに行って、バターを入れるたるを買って帰る時は、どんなにして、おおかみから逃げることができましたか。
- おおかみが、えんとつから入るというのを聞いて、こぶたはどうしましたか。

○子供が答えるたびに、本文のその部分の文章を読みきかせ、画面を見せる。

たしかめよみ 劇遊び ねらい……それぞれの登場人物になって、劇遊びをたのしむことができる。

て だ て

○役割決めをする。

三匹の子ぶた 母ぶた おおかみ わら、小枝、れんがを持った人

- 1場面から、画面を見せながら、セリフのないところも、その人物になってセリフをいわせる。
- セリフがでてこない時、全く別なセリフが出てきた時は、教師が言ってやるが、そうでなければ自由にいわせる。
- 9場面までやったら、劇遊びにはいる。
- わらの家、小枝の家は、こわれるように小さくつくっておく。
- おおかみが、ふうふうのふうでとばす時、教師がそれにあわせて持ち上げ、バラバラにする。
- その他、必要な小道具は、前もって、子供と一緒に作っておく。
- 劇遊びをする。
- 出てやっている子供と、次の出番を待つ子供と場所をきめて、こみ入らないように注意する。

書名 11匹きのねこ (文・絵 馬場のぼる, こぐま社)

作品について

いつでもおなががぺこぺこの11匹のねこが、1匹の魚をみつけ、分配をめぐってトラブルが起きる。そこで、ひげのじいさんねこに教えられ、大きな魚を見つげに出かける。湖でいかだを組み、乗り出す。島を見つげ、しばし待つうちにかいぶつ魚の出現。11匹のねこの仲間同志の協力や約束が巧みなユーモアで描かれ、楽しさの中に、子供の世界の共感を誘う絵本である。

最も本能的で即物的な要求が完全に満たされていくストーリー、ユーモアにみちたねこと魚の格闘が、

子供たちをひきつける魅力になっている。

うす紫色のねこ、場面によって変る空の色（ぼたん色、オレンジ色、黄色、うす紫色）、ピンク色の家など、日本式の絵草紙調で、明るく、大胆な構図、いきいきとした画きぶりと色の調子は、よくマッチしている。

作者の馬場のぼる氏自身は、「11匹きのねこ」は、ほのぼのともしていなければ、心あたまるものでもない。教訓もなければ、勧善懲悪のお話でもない。怪魚は悪者でもないにもかかわらずねこたちの餌になってしまう。しかし、このことは、ねこの側からすればハッピーエンドであり、ねこの喜びが伝われば、こちらもまことにハッピーである。と述べている。絵をみているだけで、ねこの気持ちが伝わってくる物語である。

目標

11匹のねこと、大きな魚の愉快な行動を読みとることができる。

だんどり

○「黒ねこのタンゴ」または、ねこに関するレコードをかける。

■ねこをかっている人いますか。

■ねこが大好きなものはなんでしょう。

○そっと本を出す

■あるところに、11匹のねこがいました。いつもおなかがぺこぺこでした。さて、お話はどうなるでしょう。

よみかせ 1回目 ねらい……絵を見ながら、11匹のねこがどうしたかを言える。

○1場面ごとにゆっくりとめくり、自由に話させる。

■あすは、この本のお話を読んであげます。今、みんなが話したお話のとおりかどうか、楽しみにしていして下さい。

よみかせ 2回目 ねらい……11匹のねこが、魚を食べるまでのあらすじが言える。

場面	て	だ	て	予 想 さ れ る 幼 児 の 反 応
表紙	○はじめ、表だけをじっと眺めさせる。 あとで裏表紙を出す。	○10匹だ	○11匹でない	○あっ 1匹いた。
とびら	○子供に自由に話させてから、ゆっ くりと表題を読む。	○あっ 魚	○おなかがぺこぺこだから食べるな。	

- | | | |
|----|---|--|
| 1 | <ul style="list-style-type: none"> 早く食べたいという気持をあらわすように速く読む。 | <ul style="list-style-type: none"> ひゃー 勢いがいい。小さい魚だ。11匹で食べられないさ。先に取った方が勝た。魚、びっくりしている。 |
| 2 | <ul style="list-style-type: none"> 威張るようにして、ゆっくり読む。 | <ul style="list-style-type: none"> ねらってる、ねらってる。大きい取りたいよね。やっぱり真ん中は大きいな。取り合いっこするかな、じゃんけんで決めるのかな。 |
| 3 | <ul style="list-style-type: none"> じいさんねこの威厳をもって読む。 | <ul style="list-style-type: none"> じいさんねこ、威張ってる。怪物みたいな魚なんているのかな。みんなおなかすかしているし、見つかるといいなあ。 |
| 4 | <ul style="list-style-type: none"> 「ひろいなあ、おおきいぞ、うみみたいだ。」待望の湖の発見の気持で、だんだん盛り上げる読み方。 | <ul style="list-style-type: none"> 海だ。怪物みたいな大きい魚みつかるといいなあ。11匹のねこ喜んでいる。うれしいよ。 |
| 5 | <ul style="list-style-type: none"> 行間のある記述のところは、十分に<間>をとって読む。 | <ul style="list-style-type: none"> 面白い舟。見張りしている。早く魚食べたいのだな。ふろしき包みの中、何かな。魚でくるまで、ああやって待ってるんだな。早く釣れればいいのになあ。 |
| 6 | <ul style="list-style-type: none"> 「でた……」「……」「はやくおいかけろ」までは、見つけた嬉しさで、一気に読む。 頁も早くめくる。 | <ul style="list-style-type: none"> あっ、魚だ。みんなサーッとそっちみたよ。 よかったね。みんな大きい口あけている。 早くつかまえにいかないと逃げてしまうぞ。広い海だなあ。 |
| 7 | <ul style="list-style-type: none"> ササッとめくり、ササッと読む。 | <ul style="list-style-type: none"> ひゃー 大きい。11匹みんなのまれてしまう。ねこが食べられる。やられる。 |
| 8 | <ul style="list-style-type: none"> 7場面に同じ。 | <ul style="list-style-type: none"> バラバラだ。早く逃げれ。やっぱりやられた。 ねこ、みんな目まわしている。 |
| 9 | <ul style="list-style-type: none"> 戦い破れたあとの静けさを表す読み方 | <ul style="list-style-type: none"> くやしがってドラムかんだたいてる。体を鍛えているんだな。相談している。どうするのかな。見張りをしている。 |
| 10 | <ul style="list-style-type: none"> 歌をうたう。 | <ul style="list-style-type: none"> 魚でた。早くとるといいのに。歌なんてうたって油断しているうちに、早く早く。ねこやっつけて気分いいんだな。 |
| 11 | <ul style="list-style-type: none"> 後半、残念そうに読む。 | <ul style="list-style-type: none"> また、やられた。今度は、しっぽではねられている。 いかだだって、怪物魚のしっぽくらいしかない。すごい。 |
| 12 | <ul style="list-style-type: none"> 場面ががらりと変って、静かに。 | <ul style="list-style-type: none"> ジー、静かに、今だ、ねているうちに、魚かわい。貝を抱いてねている。 |

13	○歌を静かにうたい、それから本文を読む。	○アハハ 子守歌きいてねている。気持よさそうだ。 ○早くとびついて食べたいの、がまんしている。 ○とらねこ大将、うしろ見て、なんか合図している。 なにすんのかな。
14	○少し早目に読む。	○アハハ 魚にねこがささったみたい。 ○やっつけろ。 ○とらねこ大将、ほら貝ねらったぞ。 ○食べちゃうのかな。
15		○よくしばったな。 ○とらねこ大将威張ってる。 ○魚、泣きそうな顔している。 ○ねこたち、うれしそう。 ○食べないでがまんすんのかな。
16	○左頁から右頁へ移るところは、十分に＜間＞をとる。	○食べたいのがまんして、歌をうたってるけど、チラッチラッとうしろを見ている。 ○がまんしてられるかな。
17		○どこへいったのかな。 ○真っ暗になってしまった。嵐がくるかもしれない。 ○早く帰って食べるといい。
18	○「よがあげました」と読んでから画面を見せる。	○やったあ。 ○いっぱい食べたなあ。 ○頭としっぽを残しただけだ。
19		○やっぱり食べたんだ。 ○べろ出して、おなかふくらましてねている。 ○アハハ、たぬきのおなかだって。ほんとだ。 ○おいしかったろうなあ。

たしかめよみ ねらい…… 11匹のねこが魚を食べるまでのあらすじが言える。

て だ て	予 想 さ れ る 幼 児 の 反 応
<p>Ⅰ 11匹のねこは、何を食べましたか。</p> <p>Ⅱ どうして、そんなに大きな魚を食べたがったのですか。</p> <p>Ⅲ 大きい魚のいるところを教えてくださいのはだれですか。</p> <p>○じいさんねこが話したところを読んでやる。</p>	<p>○魚 ○大きな魚</p> <p>○いつもおなががべこべこでした。</p> <p>○じいさんねこ。</p>

Ⅱ それを聞いてねこたちは？

Ⅱ 大きい魚をみつけて1回目，とりに行ったら，どうになりましたか。

○ 子供たちが話す時に，7・8場面を見せる。

Ⅱ 1回目は失敗。でも，あきらめないで，どうすることにしましたか。

Ⅱ 2回目にちょう戦。そして？

○ 子供が話しだしたら，11場面を出す。

Ⅱ どうしてやっつけられたのだと思いますか。

○ <間>をとる。

Ⅱ ある晩のことです。大きい魚が島の上でねているを見つけました。11匹のねこはどうしましたか。

Ⅱ それをつかまえて，すぐ食べなかったのは，どうしてですか。

Ⅱ とうとう食べてしまいましたね。

○ 14場面から17場面までの画面を見せる。

Ⅱ 大きい魚を食べてしまったねこは，どうになりましたか。

Ⅱ 夜が明けました。

○ 18場面をみせる。

Ⅱ あー，ねこたちは食べちゃった。

○ 19場面を出す。

Ⅱ 11匹：みんな，みんなたぬきのおなか。

○ <間>

Ⅱ 11匹のねこのお話できるかな。お母さんに聞かせる前に，先生に聞かせて下さい。

○ おなかいっぱい食べられるぞ。みんなで力を合わせてやれば，つかまえられる。

○ やられた。 ○ 大きくてだめだった。 ○ ねこの負け。

○ 体を鍛えよう。 ○ 見振りをたて，作戦をねる。

○ やっつけられた。

○ 大きいから。 ○ 歌なんかうたってたから，油断していると思ってかかったら，やっつけられた。

○ 大きい魚のまわりを，歌をうたいながらまわった。

○ 気持よさそうに，ぐうぐうねむった。

○ そして，つかまってしまった。

○ みんなに見せるまで食べないことに約束したから。

○ 腹ぺこだったから ○ 海が真っ暗になったから。

○ ぺこぺこでがまんできなかったから食べちゃった。

○ もうもう，おいしかった。 ○ たぬきの腹みたい
にふくらんだ。 ○ おなかいっぱいになったので
いい気持でねた。

○ ほら，言ったとおりだ。

発展として、ペープサート、人形、お面をかぶって動作化するなどが考えられる。

「よみきかせ」や「たしかめよみ」のてだてを考えていく時に、教師のてだてに対して、幼児がどのように反応するだろうかを予想してみると、てだての良し悪しもはっきりするし、ねらいを達成する方向を見失わないですむようである。「よみきかせ」の場合の幼児の反応は、幼児が心の中でこんなことをおもいうかべるであろうということであって、話しをするということではない。

書名 かさじぞう（瀬田 貞二 再話， 赤羽 末吉 画， 福音館書店）

作品について

大みそか、貧乏なじいさんは、かさ5つを持って正月の餅買いに出かけるが、かさは売れない。日は暮れて雪も降り出す。もどる途中、野中の六地藏が吹雪にさらされている。じいさんは、新しいかさと自分のかさをかぶせて帰る。ばあさんも喜び、つけものだけで年を越す。正月の朝、じいさんの家に六地藏がもちをひいてくる。年も越せない貧しさにありながら、なおも優しい二人に石の地藏も動いたという民話の世界が語られる。

主人公の暖かな愛情がテーマの昔ばなしである。子供たちと身をよせ合って語りたような話である。

すみ絵の描き方で色あざやかさはないが、山国に住む人の力強さ、たくましがよく表現されていると思う。はじめから終りまで同じ台紙のところへ、末広がりがかれ、そこに絵をあしらっているというこったやり方で表現されている。

目標

- じいさん、ばあさん、六地藏の気持を想像しながら、話を聞くことができる。

だんどり

- いろりばたをつくり、そのまわりに子供を座らせる。
- 地藏様6体（絵にしてもよい） ◦背景画として、表紙の雪の山道を大きく描いている。
- あみがさ（うち、本物は1つ）6つ用意。
- 表表紙、裏表紙を見せる。
- おおみそかという言葉の説明する。暦で示しながら。

Ⅱ 12月31日、あしたはお正月なので、じいさんはかさを売りに町へ出かけました。雪が降って、山道は真っ白。木も真っ白。じいさんは、このかさ(本物を示す)をかぶって、わらでつくったくつをはいて山道を歩いています。

○ とびら、山道のところで、地藏様が雪をかぶって立っているのをゆっくり見せる。そして、奥付を出し、かさをかぶった地藏様をみせる。

Ⅲ はて、お話はどうなるでしょうか。

よみきかせ 1回目 ねらい……じいさんの気持ちを想像しながら話を聞くことができる。

○ ゆっくりと話すように読む。

○ じいさん、ばあさんの会話のところは、特にゆっくりと声をおとして読む。

○ 頁をめくる時も、感情をおさえるようにゆっくりとする。

○ 言葉の解釈などしないで読む。もし、聞きたがる子供がいたら、よみきかせが終わってから説明してやる。

○ 6場面の、よういさ、よういさ、よういさな、よういさ、よういさ、よういさなの文字のとおり、遠くから近くへの気持ちをあらわして読む。

○ 7場面の六地藏様の声も、だんだんこちらに近づいてくる様子を声の大きさに表現する。

よみきかせ 2回目 ねらい……よみでの話に合わせて、かけ声をかけることができる。

○ 絵本はふせておく。

○ 教師の語りでやる。

○ いろり、背景画、六地藏、あみがさの準備。

○ 物語の中に子供たちを参加させ、かけ声など一緒に言う。

○ その他、留意することは1回目と同じ。

たしかめよみ ねらい……おじいさんの気持ちを子供なりの言葉で表現できる。

て だ て

○ 2場面、3場面を静かに見せる。

Ⅱ じいさんが、しかたなく家へもどろうとした時、どんなことを言ったと思いますか。

(かさは売れないし、あーあー 困ったな)(もちは買って帰られないなあ)(しかたがない。帰ろうか)

○ 3場面を見せる。

Ⅲ つららのさがった石の地藏様を見て、じいさんは、一人で何と言ったと思いますか。

（あやゝ、むごいことだなあ。はだかで雪かぶって、さぞ寒かろう。）（かわいそうに、寒いだろうな。）（このかさかぶせてやろう。）（あやゝ、かさは5つしかないし、1つだけかぶせないのはかわいそうだ。よし。わしのかさをかぶせよう。）（よかった、よかった。）

○ 答がでつくしたと思う頃、4場面をだし、見せる。

Ⅱ 家へ帰って、じいさんはばあさんに何と言ったと思いますか。

（かさは売れないし、もちは買えない。山道を帰って来たら六地藏様が真っ白になっていたの。わたしのかさもしょにかぶせて来た。）

Ⅱ ばあさんは、それを聞いて喜びました。そして、つけものだけでご飯をすませました。

○ 5場面をだしてみせる。

Ⅱ 正月の朝、よういさ、よういさ、よういさなって音聞こえてきた時、じいさんとばあさんは何か話をしなかったでしょう。 ○ 6場面を見せる。

（不思議だ。なにかかけ声がきこえる）（うちのほうへくるようだ）（元日にそり引きなんかしない。）（何の声だろう。）（何の音だろう。）（不思議だ。）（うちへくるのかな。）

○ 7場面を見せながら、

Ⅱ 「……六だいじぞうさかさとかぶせた、じいあちはどこだ、ばああちはどこだ。」と聞こえてきた時、じいさんはどうしましたか。

（おお、ここだ、ここだ。といって外へ出ました。）（だれだい、ここだ、ここだ）

○ 8場面、9場面を見せながら

Ⅱ じいさんと、ばあさんが、俵をあけてみて何と話しをしましたか。

（よかった、よかった。）（ありがたい、ありがたい。）（ひやあー 米もある。餅もある。魚もある。宝物もある。）（宝物がたくさんある。よかったね、ばあさん。）

Ⅱ それから、じいさんとばあさんは幸せに暮らしたって。よかったね。

Ⅱ 今度、かさ地藏さまごっこするよ。今日、上手にお話したじいさん、ばあさんの言葉を覚えておいでね。

発展

○ 劇遊びに発展させることも可能である。子供の言葉をそのまま生かして劇遊びをすれば、その土地特有の「かさじぞう」になるかもしれない。

○ 「幸せになったじいさん、ばあさんは、六地藏様をどうしたと思いますか。」という問いかけにより、続き話を作り、絵に表現したりする。それをさらに、絵本にしたり、紙芝居にすることもできると思う。

書名 おやゆびちーちゃん (アンデルセン作, 木島始 訳, 堀内誠一 画, 福音館書店)

作品について

「親指姫」の名で知られたアンデルセンの名作を, 的確な美しい日本語で完訳し絵本にしたものである。

チューリップの花から生まれた親指ほどの小さな女の子が, ヒキガエル, コガネムシ, ノネズミ, モグラ, ツバメとの出会いの中で, 危険や冒険をかさね, 最後には幸福を獲得するという, 波乱にみちた美しい物語である。

話は, かなり長い, 話自体のもつ期待感, 緊迫感, あるいは, さし絵の力によって, 子供の心をひきつけるのではないと思う。

抑制された色彩で丹念に描かれた絵は, 細密画のように美しい。また, 登場するものの表情が, その性格をも表すような描き方など, 物語の世界をみごとに盛りあげている。

目標

おやゆびちーちゃんが, 幸せになるまでの気持ちの変化を読みとることができる。

だんどり

◦表, 裏表紙を開いて見せ, 話の内容を自由に想像させる。次に扉を開いて見せ, ツバメが物語に関係あることに気付かせる。

■おやゆびちーちゃん, この親指くらいしかないのです。このおやゆびちーちゃんがさまざまな所へ行くのです。どこへ行くのか, よく聞くことにしましょう。

よみきかせ 1回目 ねらい……絵を見ながら, おやゆびちーちゃんが, どこへいったか, だれに会ったか, その時, どんな気持ちだったかを簡単にいえる。

■おやゆびちーちゃん, アンデルセン作, 木島 始 訳, 堀内誠一 画

◦細かい描き方なので, 子供によく見えるようにする。(実物幻灯機)

◦子供にわかりにくいと思われるところだけ簡単に説明する。

■絵を次々だしていきから, どこなのか, だれにあったのかだけお話してみましょう。

よみきかせ 2回目 ねらい……絵を見て判断したこと(どこへ, 誰と, その時の気持ち)を, 文章を読んでもらいながら確かめることができる。

◦全体を3回に分ける。

- | | |
|-------------------|--|
| 1. P 6 ~ P 27 まで | } ■さて, おやゆびちーちゃんは, どうなるでしょう。次はあした。
◦幼児なりに, 確認したり, 期待をもったりしながら読み進めていく。
◦3日間続けて読む。 |
| 2. P 28 ~ P 55 まで | |
| 3. P 56 ~ P 74 まで | |

たしかよみ　ねらい……おやゆびちゃん（おやゆびちゃん）の気持ちになって劇遊びができる。

- どの場面を劇遊びにしたいか子供たちが決める。そして、グループをつくる。
- 役割決めをする。
- 子供たちで練習をし、交代で発表する。
- 絵本にでていない会話などあったら、うんとほめておく。

作品の取扱いについて

長文であり、絵は、細密画のようであるから、40名もの多数の子供に読みきかせるには、いささか不向きであると思う。しかし、子供たちが、相当、よみかかせに慣れていて、しかも、5才児の2月とか、3月であればよいのではなからうか。

その他、「アンデルセン」についても、この時期であれば、だんだんの時か、物語全部を読みおえた時に簡単にふれることもよいと思う。

「アンデルセン」について

もしも何かの風の吹きまわして、児童作家の王様を選ばなければならないとしたら、わたしが票を入れるのは、ハンス・クリスチャン・アンデルセンである。と、ポール・アザールは言っている。

アンデルセンは1805年4月2日、バルト海の灰色の波がうち寄せる漁村、フューネン島のオーデッセに生まれた。父は、婚礼の寝台も壊れた霊柩台で作らなければならないほどの貧しい靴屋だった。母は、彼にデンマークのさまざまな古い民謡を歌ってきかせた。彼は、この両親から、土地っ子としての血を受けつぎ、それは生涯彼の気質となったのであった。14才の時、彼はコペンハーゲンに行った。

彼は踊り手か、歌手か、俳優になりたいと思った。やがて彼は、数人のパトロンを見つけて、生活をもってもらったり、学校へやってもらったりする。不格好で、ひょろ長く、やせっぽちで、おまけに鼻も手も足も人一倍大きな少年が、学校の教室で子供たちと一緒にいる光景は、まるでかわいらしいあひるの子供たちのなかに一羽の醜い若い白鳥がまじっているように滑稽に見えた。アンデルセンは、数多くのエッセーやお話や詩や小説を書いたが、1835年に「子供のためのお話」を発表してからは、相次いですばらしいお話を世に送って、デンマークの人々を歓喜させたのである。

彼は王である。なぜなら、彼は物語という小さな枠のなかに宇宙のあらゆる舞台を取り入れることができたからである。それは子供たちにとって決して多すぎはしない。その小さな枠の中には、ただコペンハーゲンと、そのれんが造りの家々や、赤味がかった大きな屋根や、銅色の円屋根や、太陽に輝くノートル・ダム（ノートルダム）の金の十字架が見出されるばかりではない。そこには、沼と森と、風になびく柳をもち、海にかこまれたデンマーク、スカンディナヴィア、雪と氷に閉ざされたアイスランドも見出されるし、また、ドイツも、スイスも、太陽の光がさんさんと降りそそぐスペインも、ポルトガルも、ミラノも、ヴェニスも、フィレンツェも、ローマも、パリまでも見いだされるのである。

アンデルセンは王である。なぜなら、生命あるものと生命ないものの魂の中に、だれも彼のようにはいりこむことはできなかったからである。動物たちも人間に理解できる言葉を話すということ、これは、アンデルセンや子供たちが一番よく知っていたことである。……と「本・子ども・大人」より。

V おわりに

●以上、絵本の与え方の試みについて例をあげてみた。これは物語からそれずに発展する余地のあるものだけである。しかし、実践をしてみて失敗をいくつかした。それは、理論と経験にしたがって「てだて」を考え実践をしたところが、外見上は物語から発展したかのようにみえたが、子供は動作化することのみ興味があり、物語から完全に離れてしまっていた。このことから私どもは、よみきかせを繰り返しやることにより物語にひたらせることができる絵本と、遊び、劇化、工作、絵画、粘土などで活動することによってそのものになりきれぬ絵本とあることがわかった。また、聞けない子供というのは、さし絵に助けられて多種多様なイメージを心の中につくりだすことができないからで、これには、直接、間接の体験を絵本を通して獲得させていく必要があることがわかった。これらを解決していくには、子供たちの興味、欲求を尊重しながら、感動の質を高めていくような「てだて」、ますます作品の味わいを深め、面白さ、楽しさがわかってくるような「てだて」を、保育する者が自己のものとして生みだすことが大事である。

●読書が人間形成の上で果す役割の重要性についてはことさら言うまでもないが、ここにその例をあげてみる。子供の変化としては、きき取りの態度がよくなり、言葉が豊かになってきている。幼児なりに絵本の選択ができ、なによりも考える態度がみられるようになったということである。一方、親の方はどうかというと、子供が本好きになったことを喜び、こんなに楽しい良い本があったのかと目を開かれた思いをし、子供に読んでやるのが楽しみになり、これからずっと続けて読みきかせをしてやりたいともらしている。一般的に言うところのこのようなことがあげられるが、短期間に変わった例をあげると、A男は、依頼心が強くやる気が全くない。話の聞きとりも悪く最後まで聞くことはなかった。ところがよみきかせをはじめから2か月くらいで集中して聞くことができるようになり、想像したことを表現して楽しむようになった。一学期末には教師の発問にもよく応じ、印象的な部分だけ発表するようになった。それ以来、急速に進歩し、内容を理解して積極的に行動するようになり、それに応じて借りる本も多くなった。「しろくまちゃんのほっとけーき」などは3週間連続して借り、母親と一緒にホットケーキ作りなどもしている。母親の例としては、教育に対しては無関心、本を借りることも、子供に読んでやるということもなかった。ところが6月ごろより本を借り読んでやるようになった。子供の喜びが母親に伝わるものだから11月末までに24冊の絵本を借りている。読書ノートにも実によく記入している。こんなことから園活動にも積極的に参加し、子供のこと、園のことについて熱心になってきた。このようになったのは、教師の熱意もさることながら、すぐれた本との出会いも大きかったのではなからうか。

●「あるすぐれた本が子供の心に与える激しい衝撃は、まさに一つの実り、たしかな一経験である。この経験は、あらゆる種類の印象に一番影響されやすいこの時代に、判断力とよい好みとの基準を作りあげる力になる」

このように大きい力のあるすぐれた本を私どもはどうして選定したらよいのだろうか。なにかよりどころがほしいということから、ここに「日本子どもの本研究会」でだしている「どの本よもうかな？」にある幼児向のものを載せてみた。(指導例にとりあげたものは省いた。)

どの本よもうかな

選定の基準の一つとして、普通程度の読書力のある子供が、その本を読んで、あるいは読みきかせしてもらって、楽しむことのできると思われる下限の年代をおおまかなところでおさえてみようとした。

なお●印は、読みきかせだけでいいのではないかとと思われるものの一部である。○印は、昨年度、実践研究集録第11集に載せたものである。

書 名	発 行 所	書 名	発 行 所
あおくんときいろちゃん	至 光 社	あかいくし	津 越 書 房
●あかちゃんのうた	童 心 社	いたずらきかんしゃちゅうちゅう	福音館書店
いたずらねこ	福音館書店	いたずらラッコとおなべのほし	あかね書房
いっすんぼうし	"	いないいないばあ	童 心 社
いやいやえん	"	うさこちゃんとうつぶつえん	福音館書店
○おおきなかぶ	"	おおきなおおきなおいも	"
おかあさんだいすき	岩 波 書 店	おばけのバーバパパ	偕 成 社
おばけりんご	福音館書店	おひげのとらねこちゃん	童 心 社
●おふろでちゃぶちゃぶ	童 心 社	●おやすみなさいのほん	福音館書店
●おやすみなさいフランス	福音館書店	●おんなじおんなじ	こぐま社
かずくんのきいろいながぐつ	"	かにむかし	岩 波 書 店
●かばくん	"	かみであそぼう	福音館書店
きつねとねずみ	"	くちばし	"
くまでんしゃ	岩 崎 書 店	ぐるんぱのようちえん	"
こぐまちゃんおはよう	こぐま社	三月のかぜ	講 談 社
三びきのくま	福音館書店	しずかなおはなし	福音館書店
したきりすずめ	講 談 社	しっぽのはたらき	"
じどうしゃ	福音館書店	しょうぼうじどうしゃしぶた	"
●しろうさぎとくろいうさぎ	"	しろくまちゃんのはっとけき	こぐま社
すてきな三人ぐみ	偕 成 社	そりになったブナの木	国 土 社
だいちゃんのちびねこ	ポ プ ラ 社	たべられたやまんば	講 談 社
たべられるしよくぶつ	福音館書店	だるまちゃんとてんぐちゃん	福音館書店
たろのえりまき	"	たんじょうび	"
ちいさいモモちゃん	講 談 社	ちきゅうはいきてうごいている	童 心 社
つとむくのかばみかき	偕 成 社	○てぶくろ	福音館書店
てぶくろくろすけ	福音館書店	どうぶつ	らくだ出版
どうぶつえんができた	あかね書房	どうぶつのこどもたち	岩 波 書 店
どこからきたの	童 心 社	とこちゃんはどこ	福音館書店
とらよりつよいうさぎ	偕 成 社	どろんどこぶた	文化出版局
○どろんこハリー	福音館書店	なにしているの？	童 心 社
●日本のわらべうた	さえら書房	ニャーンといったのはだ一れ	偕 成 社
ねこ	至 光 社	ねこ、ねこ、こねこ	"
はけたよ はけたよ	偕 成 社	はじめてのおるすばん	岩 崎 書 店
●はなをくんくん	福音館書店	はははのはなし	福音館書店
ピーターのいす	偕 成 社	ピーターのくちぶえ	偕 成 社
ピーターラビットのおはなし	福音館書店	ひとまねこざる	岩 波 書 店
ひみつのかくれぼし	偕 成 社	ふうちゃんのおたんじょうび	新日本出版
まこちゃんのおたんじょうび	こぐま社	マーシャとくま	福音館書店
まっくろネリノ	偕 成 社	マドレーヌといぬ	"
まりーちゃんとひつじ	岩 波 書 店	もぐらとずぼん	"
●もりのなか	福音館書店	もりのむしとのはらのむし	"
やぎのひりいとふとったなかまたち	文化出版局	ゆかいなかえる	"
ゆきのひ	偕 成 社	りんごのき	"
ロボット・カミイ	福音館書店	わたしとあそんで	"
わっしょいわっしょいぶんぶん	偕 成 社		

●選定にあたっては、世間に高く評価されたものを推薦しがちであるが、良書が子供にとってそのまま適書であるとはいえない。子供が心の底から求める本はどんなものなのか、端的に答えれば、いわゆる名作として梓づけされた良書ではなくて、子供の生活、要求にそれぞれ合致した本である。理想的には対象となる図書のすべてに教師が目を通すことが望ましいが、それは不可能に近いので、推薦図書のリストや書評を可能なかぎり収集し、教師間で討議の上、子供の実態を参考にしながら選定した方がよいと思う。

●選定に当たっての観点としては、できるだけ入手しやすいものですぐれたもの。子供の興味、関心、感動をよぶおこすもの。楽しい読み物であること。子供の成長にあい、さらに成長、発達をうながすもの。原作そのものか、原作に近いもの。記述が正確なもの。翻訳本は、できるだけ定訳本であること。絵が物語を語っているもの。……など。一冊の絵本を手にして次のような選定法もある。「何才ぐらいの子供が喜ぶだろう。読んでやれば、幼児も小学校の低学年の子供でも十分楽しんで読むに違いない。初めて見た時は興味を持つが、幾度も繰り返して見ることはないだろう。これは5才以上の、それも相当に読んでもらっている子供向き。男の子向き（女子向き）。一部の子供にはたまらない魅力だろう。物語はいいのだが、さし絵がよくない。さし絵は面白いのに、物語にふくらみがなく面白くない。さし絵も文章もいいのだが、40名のクラスでは無理だろう。同じ内容でもあちらの出版の方が子供の心をつかんでいる。本の型が大きすぎる。さし絵に間違いがある。意図不明。表紙、印刷、製本がよくない」²⁾など。要は、教師が絵本のよしあしを選びわける目を持つことである。それには、「よい絵本を数多く読み、その文章と絵がいかうまくとけあって、その物語の世界を読者にありありとみせてくれるかを、自分で体験することが最良の方法であり、近道」³⁾ではなかろうか。

●「子供の時代は感受性の強い形成期で、非常に染まりやすく、そのうえ時期が短いから、おとな以上に凡作は不必要、かつ、それにかまける時間もない。子供の頃の印象は、永続する。そして、この印象が蓄積されて、成人した時にあらわれる人格のパターンとなる。そうすれば、まさに「子供はおとなの父」の諺どおりである。こう考えてくると、私たちは、子供が読書から受ける印象に、無関心でいていいものだろうか？」⁴⁾

主な参考文献

- | | | | |
|--------------|------------------|------------------|-------------------------------------|
| 1) 4) | L・H・スミス著 | 児童文学論 | 岩波書店 (1972) P11 P12 |
| 2) 3) | 松井直著 | 絵本とは何か | 日本エディスタースクール出版部
(1973) P105 P106 |
| ポール・アザール著 | 本・子ども・大人 | 紀伊国屋書店 (1972) | |
| 日本子どもの本研究会編 | どの本よもうかな? | 風濤社 (1974) | |
| 北尾倫彦・杉村健・他著 | 幼児の精神発達と学習 | 創元社 (1974) | |
| 宮野英也著 | 幼年期の文学教育 | 明治図書 (1970) | |
| 奈良女子大附属幼稚園 | 絵本を通して育つもの | (1972) | |
| 日本子どもの本研究会編 | 子どもの本棚 1・5・11・12 | 明治図書 (1971~1974) | |
| 雑誌 保育とカリキュラム | 10月号 | (1974) | |